

第4回 平成28・29年期 神奈川県青少年問題協議会 議事録

日時 平成30年1月31日(水) 11:00~12:00

会場 県庁新庁舎8階 議会第4会議室

○青少年課長

本日はお忙しい中、第4回神奈川県青少年問題協議会に御出席いただき、ありがとうございます。青少年課長の横溝でございます。

開会に先立ちまして、本日の出欠でございますが、協議会委員12名中、8名の御出席で定足数に達しております。また、本日は傍聴希望者が1名であることを御報告させていただきます。

それでは、笹井会長に進行をお願いいたします。

○笹井会長

会長の笹井でございます。ただ今から第4回神奈川県青少年問題協議会を開会いたします。本日の議題は、「最終報告書(案)について」です。これにつきまして、萩原部会長から御説明をお願いします。

○萩原副会長

はい。ここから最終報告(案)につきまして、主に資料1の報告書の概要版をもとに御説明したいと思います。

今期の青少年問題協議会では、「若者による地域づくりのカタチ」副題「若者のチカラを地域のチカラに」をテーマに、昨年度から、審議を行ってまいりました。昨年8月には、多世代ワークショップを開催し、協議内容の検証も行っております。本日はこれまでの審議結果を最終報告の案として取りまとめ、お手元にお配りしております。では資料1に基づきながら御報告します。

まず、「1 審議テーマの設定」がございまして。これは平成28年3月に改定した「かながわ青少年育成・支援指針」を踏まえて、青少年の成長と自立を支援する新たな施策を展開する上で、当事者である若者が主体となって、大人とパートナーシップを組み合わせながら、地域づくりを進めることが重要であるという視点に立ち、調査審議を行うこととしました。前期の協議会で議論をして改定された指針ですが、ここに出てきたキーワードが3つあります。当初は若者の自立支援、青少年の自立支援という話でしたが、「自立・参加・共生」というこの3つがある。単に自立支援だけではないということでした。逆に言うと、参加と共生も伴ってないと自立という言葉は生まれまいだろうというのが、前期の議論の中でありまして、指針の中に、新たに参加と共生という言葉が加わりました。このことを踏まえたうえで、この「若者による地域づくりのカタチ」というテーマとなったという経緯があります。つまり、若者も一緒になって、この社会の一員として参加し、他の多世代とともに生きるということとはどういうことなのかということが根底に問題意識としてあり、そこからこのテーマが生み出されたということになると思います。

次に、「2 若者と地域の現状と背景」です。若者と地域の現状と背景はどうであろうかということ、この最終報告でまとめさせていただきました。4つポイントがございまして。

1つ目は「1 若者の「チカラ」について」です。サブタイトルに、「若者のチカラを地域のチカラに」とありますけれども、この「チカラ」をどう捉えるかということです。従来は、力といえば、若者に大人や社会が期待する能力、必要と考える能力を身につけさせるということが期待されていたわけです。しかし、この協議会において、この若者のチカラをあえて、カ

タカナに表記しているという意味には、そういう能力的なもの、身につけさせる「〇〇力」とは異なり、生活の中で自然と身につけ、具体的な状況や関係性の中で発揮される力と捉える必要があるのではないかと。例えば、普段は言語コミュニケーションが苦手だけれども、小さな子どもの相手は非常に上手であるとか、聞く力がすごくあるとか、その子がいるだけで場が和むということがある。そういったチカラというのは、「〇〇力」と後からトレーニングしてつけさせるものとは違う次元のものです。そうしたチカラというものはある意味、言い換えるならば、若者の存在自体が大人や社会に与える「影響力」と表現してもよいのではないかとということです。

次に、「2 大人と若者の関係について」の現状把握です。今期の協議会では、若者が多様な年代の大人に出会うことが少なくなっているということ。そして大人と若者の信頼の絆が育まれにくくなってしまっている。お互いにお互いのことを思い込んでしまっていて、そもそも信頼の絆の部分を実感としては掴みにくくなってきているのではないかと我々は考えております。日常の中で若者自身が弱さを出せない、あるいは、同年代同士であったとしても弱さを共有できないということが、若者と大人との信頼と寛容の関係をつくる上でも障壁となっている。この弱さを共有できない、弱さを出せないという中には、例えばインターネット、SNSを通じて、今いろんなところで誹謗中傷というものが起こっており、「炎上」という形でも言われますが、日常の若者同士のふとしたコミュニケーションで、メディアを介した関わりの中で思い込みが思い込みを呼び、ちょっとしたふとしたことで、お互い傷つき合ってしまうようなことが、日常化しているのではないかと指摘もありました。その中で、こうした弱さを出せない、弱さを共有できないという、現状理解となりました。それは同世代、また、多世代との信頼関係と寛容な関係を作る上でも、障壁となっている。

3番目に、「3 若者の社会参画について」です。大人と若者の関係性については、従来は青少年育成、あるいは青少年指導という言葉で、大人が子どもや若者の成長発達に向けて、育成指導あるいは支援するという考え方があったわけです。どちらかという大人の側や、地域の側が、子どもを引っ張っていく、大人に向けて引っ張っていく。リードしていくという、そういう関係性の構図が前提にあったわけです。そのところが今、実は問われているのではないかと。大人自身も引っ張ろうと思っても、そもそもここでの前提となる大人と若者の関係性そのものが、だんだん顔が見える関係ではなくなってきている。信頼の絆が育まれなくなってきているという前提から考えますと、従来の指導育成という考え方そのものも、再検討を迫られているという理解があります。

4番目、「4 地域の状況について」です。従来、子どもや若者の成長のベースになってきた地域についてです。地域はどういう現状だろうかと見たときに、町内会や青年団などは従来、今も、もちろん存在していますし、生き生きと活動されている方も多くいらっしゃいます。それが、だんだん高齢化が進んできているという現状もあります。地域を今までは、網羅的な組織で地域を支えてきた部分がありますが、そうした面のイメージで捉えて、町内会の伝統的な地域組織が、地域を動かしていく、あるいは若者、子どもを育てていくということは非常に厳しくなっているという認識がありました。

こうした若者と地域の現状や背景を踏まえた上で、若者と地域の関わりを考える上ではどうすることが重要なポイントとなってくるだろうかとということをもとめました。それが、「3 「若者」と「地域の関わり」を考える上で重要な視点」の3つの柱になります。まず一つは、若者と大人も、もう一度繋がり、出会い、ともに場を作るところから考えなければいけないということです。それをさらに、(1)、(2)、(3)と3つの柱だてに整理しました。まず、「(1) 人と人が出会う場所」ということが、改めて大事になってくる。そこでは人のつながりの大切さ、多世代の人が居たいように過ごせる空間、若者が大人に出会い、話を聴く場、チャレンジできる場。場のありようとしては、最初から先ほどの大人が子ども、若者がある一

定の方向に持っていくために作る場とはまた違った、ともにそこに居られるような場をイメージする必要がある。そして、「(2) 大人と若者が互いの弱さを語り、聴く」という、そういう場のあり方、あるいは関係性のあり方が大事になってくるだろうということです。それは、若者の現状を捉えたときに、実は大人も若者も空間的、精神的な居場所が今少ないのではないか。そして、失敗も含めて現状のままの若者を受けとめていくような場が非常に少ないのではないかという問題意識からこういった場が必要である。若者だけではなく大人も、そもそも弱さをもっていますし、未完成な存在だということです。これは生涯学習にも繋がる考え方です。生涯にわたって私たちが学び続けるということを前提に、大人はあるところで完成して終わりではないという前提があります。そういった意味でも、若者だけではなく大人も未完成である。そして、若者も大人もフラットな関係性からもう一度信頼の絆を紡ぎ直すことができるのではないか。そして傷つきを話し、対処する方法を見つけられる。特に若者も非常に日常生活の中で、いろんな形で傷ついている状況がある。そこから立ち直っていくのは、そのことを、安心して語れる誰かがいてくれるということが必要です。傷つきを話し、語り、自分の中で整理していくことによって、もう一度社会を乗り越えていくことができる。そういう対処する方法を見つけることができる。そして3つ目、「(3) 多様な世代の交流と対話」です。多様な世代を超えた者同士の対話的な関係が大事だろうということです。やはり、大人が指導、育成するというものから、対話していくという関係性の転換が求められている。また、親でも教師でもない第三の大人のような、斜めの関係性をとり持てる大人の存在や関係性も大事だということです。多世代がまざっていられるということ、現状、多世代がまざっている場合は日常ほとんどない状況で、やろうとすると、どうしてもベテラン、大人の経験をもとに、若者に経験を話す。アドバイスしたい気持ちは分かりますが、逆にそれが説教になってしまうことがよくあるわけです。だから、多世代をまぜ合わせながら対話的な場を作るためには、評価や競争がないということが大事だとまとめられました。

次に、大きな2番目の柱です。「2 若者と大人がともに経験をやる」ということが大事ではないかとまとめました。これは、二つの柱に整理されます。「(1)若者と大人がともにつく」という考え方で実践したらいいのではないかという整理です。新しい社会を作り出す力というのは、もちろん若者にあるわけですがけれども、若者だけが作るわけでもなく、大人が引っ張りあげて作るわけでもなく、若者と大人がともに、一緒になりながら、協働しながら新しい社会を作っていくという視点で考えていく。そして、若者が本気で力を出す出番や機会を作っていくこと、これは逆に言うと、今回、20代の委員、30代の委員、若い世代の委員にも参画していただいております。その中で出てきた意見として、自分たちが日常の中で必要とされている感じがしないという指摘がありました。確かに、今の10代、20代、30代、なかなか日常の地域の中で、稼ぎとしての仕事とは別に、何が必要とされているのかが、やはり実感が伴っては出てこない。地域づくりということを考えると、その中で、若者が本気で力を出す出番が必要で、また必要とされていることが大事で、それには若者と多世代がともに考えるということがないと、それは出てこないだろうということです。若者も大人も、作り手側に立っているという、その視点が必要になってくる。これは大人がお膳立てをしてどうぞというのでは、やっぱりそこは若者もあくまで敷かれたシナリオの中で、踊るだけであってそれは当然本気という部分にはなっていないわけです。お互いに本気になれる出番を作るという意味でも、若者も大人も作り手側に立っているという考え方です。「(2) 若者と大人がともに学ぶ」です。同じようなことをいろんな角度で言い直していますが、対等な関係性というのは、言い換えれば大人と若者がともに学ぶということです。大人もできないことを自覚することも大事ではないか。大人自身も、今生きづらさを抱えているわけです。この場でも議論になった中で、例えば、子育て中の親御さんは孤立した子育ての中で、非常に苦しい思いをしており、それを人に語ることもできない。そういった生きづらさがいっぱいあるという話も出ました。やっぱり大人世

代であっても、自分たちも生きづらさを抱えており、自分たちだけではできないことだということ、自分たちの中にある弱さの部分を実感することで、お互い対等になれるのではないかという話になりました。そういう中で価値観の違いを共有していくこと。大人が若者を教えるという先入観もなくしていくこと。そして年齢に関係なく学び続けることができるということでもとめました。

3つ目、「3 若者と大人がともに進む」という視点です。大人が若者の横や斜め後ろにいる役割、先ほどのような斜めの関係として大人がいることも大事だと、そして大人が若者を応援する姿を見せていくことも大事になってくるだろう。「若者のチカラを地域のチカラ」といったところで、そもそも、大人が若者を大事にしている、愛情をもって見守っているということが若者に伝わっていない、あるいは大人側がただやってみろというだけでは、やはり若い人たちにとっては、なんでやらなきゃいけないのかという、どうして、社会に参加しなければいけないのかという、そもそもの動機が生まれてこないと思います。やっぱり、実は若者に対して大人も温かく見守っている、応援したい気持ちがあるということを見せる必要がある。これは多世代ワークショップを通じて、本当に多世代の20代から50代60代、参加者の中で、感想として出てきたと思います。20代の参加者の中に、50代とか60代の方たちは、自分たちのことをこんなふうに思ってくれていたのかという感想も出てきております。やはり、信頼の絆がなかなか育たないのは、そういうことを見られない、感じられないから、どこかでちょっと不審に思っている。大人世代に対して若者世代も不審を持っていて、大人世代も同じく、どこかで今の若者には力がないじゃないかと思っている。そういう部分を、取り払っていくことは大事になっていく。若者を支えて育てていく人の循環も必要です。これは、神奈川県でも青少年指導者の表彰式を毎年やっておりますけれども、年々高齢化が進んでいます。やっぱり、持続可能な社会になっていくということを考えたら、若者が育っていく、若者とともに育ちあっていくような大人の方も循環していかなければいけない。そういった視点も、これから必要になってくる。

こうした議論を踏まえまして、「5 今後に向けて」ということで、提言を5つにまとめました。「若者が活躍する地域づくりを進めるために」という、サブタイトルをつけておりますが、先ほどの部会で意見がありましたので、この部分は少し表現を手直しする予定でおります。ここは「今後に向けて」というよりも、「若者が活躍する地域づくりを進めるための5つの提言」というふうに表現をかえて、はっきりと提言というように修正させていただこうと思っております。この資料では、ポイント1から5となっておりますが、提言1から5に修正します。

提言1として、「地域と地域づくり ～場の創出～」が大事だろう。ポイントとして、地域づくりを進める上では人と人をつなげ、対等な関係性となる場を構築できる人材が必要であるということです。そして、時間的、空間的にゆとりのある場で人と顔を合わせることにより、いろんなものの見方を知ることができる、そういう場が大事だろう。そして地域に様々な考え方を持つ人たちが交流できる場があることにより、若者が多様な人間関係を築き、物の見方を多元化できる機会となるであろう。そして、今後の地域の捉え方は様々な場や主体が相互に関わって多層的な地域となることをイメージすることが大事であろう。つまり、ここでは、従来、今も頑張ってくださいている町会の方々、あるいは子ども会とか地域の網羅的な伝統的な育成支援の組織がありますが、そこには、様々な市民活動団体が生まれてきています。NPOという形も生まれてきていますし、コミュニティビジネスという形で、若者支援に乗り出してきている団体も出てきています。そういう意味では非常に担い手が多様化しているので、それがばらばらというよりも、お互いに緩く繋がりあいながら、協力して多層的な地域イメージをつくれたら、もう少ししなやかな強さを持った地域になるというイメージを持ったらいいいのではないかと思います。

次に提言2ですが、「人と人をつなげる ～繋がり創出～」ということが、このからの地

域づくり、若者が活躍する地域づくりには大事である。地域は生活の場であり、人は、地域の様々な場で、人間関係を持ち、生活している。地域では子ども、若者、大人の各世代が発揮する力を持っており、存在意義がある。世代を超えて地域の様々な場で人と人の共感的な関係を育む役割を担う人材が増えていくことが大切である。そして、町内会や子ども会、子ども・若者の育成支援活動などを運営している人たちがつながり、協力しながら多層的な地域にしていくことが必要である。2つ目の丸の「人と人の共感的な関係を育む役割を担う人材が増えていくことが大切である」という部分ですが、実はここが今期の議論の中では非常に大事な部分になってきています。どのような人材が必要かといったときに、よく言われるのは、様々な人をつなげるコーディネーターとか、あるいは青少年を育成支援する人が必要だという言われ方をされてきている。ここでは、もう一步踏み込んで、人と人の共感的な関係を育むというふうに表現しました。これは何故かといいますと、そもそも大人も若者も今、根本的に年齢、世代、属性を超えて、あるいはその根底には、やっぱり生きていくことの弱さがある。その弱さにお互いが気づくことによって共感が生まれていく。その共感が生まれることによって、もっとお互いに安心して語りあえる関係性であるとか、その中で信頼と繋がりが育まれる。そうするとお互いにお互いのことを認め合ったり、尊重しあったりということが当然出てくる。私たちが、力を発揮するときは、どういうときか、そういう信頼の絆があったときに初めて自然と動き出す力が生まれてくるだろうという議論をした上で、この言葉に集約されています。この共感という言葉は非常に大事にしております。

次に、提言3「若者と大人が共感し合える関係を育む ～対等な関係性の構築～」です。先ほどの提言を受けて、提言3も連なっています。地域づくりを進める上では、世代を問わず一緒に地域をつくることのできる関係性が大事で、そのために若者も大人も安心して自分らしさを発揮できるよう対話することが大切である。若者と大人が共感し合える機会を持つことによって対等な関係性が生まれ、地域づくりを続けることにつながる。少し補足しますと、そもそも最初に対等であることが大事だとお題目のように言ったとしても、あるいは受容することが大事だ、共感が大事だと言ったとしても、実際の現場に落とし込まれた時にどうなるかといったら、じゃあ共感してやろうか、受け入れてやるよといったことに転換してしまう可能性が非常にある。対等なふりをしてしまうということです。そういうことではなく、単なるテクニックや構えという問題ではなく、私たちが本当に素直に共感的な関係性が生まれる時はどういう時かという、繰り返しになりますけども、お互いがお互いの弱さにタッチすることからではないかと思います。傷ついたことをお互いに素直に語り合うこと。あるいは逆もあると思いますが、例えば、今自分が力を入れていることは何なのか、夢中になっていることは何なのかということを素直に語り合う。そういったことから、共感性、共感し合える関係が生まれてくるのではないかと。ここでいう関係性というのは、単なるテクニックではない次元から、大人と若者も信頼の絆を育むということについて、思いを込めて言っております。

提言4「若者と大人がともに地域をつくる ～相互理解と協働～」です。若者の持つ「チカラ＝社会に与える影響力」を大事にしながら、大人とともに地域づくりを進めることが大事である。若者も大人も互いを理解することが大切である。お互いの得意なことを出し合い、苦手を補い合いながら、相互にチカラを発揮しあうことが大切である。若者と大人がパートナーシップを持ち、世代にとらわれず一人ひとりが主体的に地域づくりに関わるということが求められる。

提言5「場づくりを担う人に求められること ～寛容な場の醸成～」です。これは、提言2で「人と人の共感的な関係を育む役割の人材」というふうに出てきました。そこをもう少しクローズアップして、まとめたところになります。そうした場づくりを担う人は、良い悪いという考え方で、場で生じることを評価せず、ありのまま受け入れることが大切である。これにより、場に集う人が安心して対話でき、共感できる場をつくることのできる。また、集う人が

安心できる場となるよう、時間や空間にゆとりを持たせることが必要である。場づくりを担う人は、専門家ではなく、地域で地道に活動している方々である。家庭など普段の生活においてもお互いを評価せず、ありのまま受け止め、共感を大切にする場をつくることを心がけていくことが大切である。今回の協議会において、多世代ワークショップという実験的なことを行いましたけれども、これは非日常的な場ではなく、むしろこうした寛容な場というものを、いかに日常の中で、醸成することができるかということでもまとめております。もしかしたら地域の中で既に、さりげなく共感的な場づくりに心を砕いてらっしゃる方は多々いらっしゃるかもしれませんが、そういったところをあえて「見える化」しています。そういう意味では、この担い手というのは、誰か専門的な人を養成して、それでそれを増やして、どんどん落下傘のように地域に派遣しましょうというのとは違い、地域で地道に活動している方々それぞれが、担い手になる。その中で、一つの文化として、こういった場が生まれ、多世代がともに生きるような、持続可能な地域社会ができるということでもまとめております。

最後に、「行政に期待される役割」をまとめております。行政に期待される役割としては、町内会、子ども会や子ども・若者の育成支援活動などの団体で場づくりを担う人材に対し、場に集う人々が互いに共感しあえる心構えなどを学ぶ機会を設ける。これは1つ、人材育成ということでも、様々な活動の主体の方々にこうした研修を通して、改めて場づくりについて学ぶ、あるいは自分自身の経験を整理するような場をつくっていくことを行政に期待したい。もう1つは、民間と行政が協働しながら地域の様々な場が緩やかにつながり合い、多層的な地域を構成する環境を整える。この大きく2つを、今後行政に期待する役割としてまとめました。以上です。

○笹井会長

はい。どうもありがとうございました。ただ今、萩原部会長から最終報告案についてご説明をいただきました。つきましては、委員の皆様からご意見をいただきたいと思いますが、まずは企画調整部会以外の委員の皆様からいただきたいと思います。米村委員お願いします。

○米村委員

はい、ありがとうございます。今、御報告をいただきまして、自分がいろいろ地域で取り組んでいることに対して、特に大人として、若者に対して教えるというか、上からのような立場になってしまっているのかなということをお話を伺いながら自分でも感じているところがあります。自分自身も、今年の8月にやられた、多世代交流など若者と大人が、どういう形で絡みあうかという。ワークショップといったものは自分自身も体験して、子どもや若者に対する接し方を勉強していかなくてはならないと御報告を受けて感じるところでございます。また、行政に期待される役割というところでは、これから心構えなどを学ぶ機会を設けるということがありましたので、そういう場に、自分も、今回委員という立場でもありますが、逆に地域の一員でもありますので、本当に地域の一員として、こういうものに触れる機会というものは、あったらなと感じております。本当に、若者のチカラを地域のチカラにというのは、地域の人たちも望んでいることだと思います。これは少しでも、地域に広げていくことを早くやっつけなければいけないことだと思います。先ほどお話をされていた団体は、高齢化がどんどん進んでいます。みんな早く何とかもって若返りたいと、組織自体は思っているのです。でも、やっぱりどうしてもまだまだ年配の方たちが中心となってやっているということも多いと思いますので、行政だけではないですが、いろんな力が、一つになって、一つずつの団体を少しずつ若返らせていく、若者をもう少しここから含めていくという取組みが必要だと感じました。部会の皆様、本当にいろいろ議論していただき、報告書を御調整いただきまして本当にありがとうございました。ぜひ、私自身もまた勉強させていただきたいと思います。ありがとうございました。

います。

○笹井会長

どうもありがとうございました。それでは、企画調整部会に参加された委員の皆様から、ぜひ、御意見あればいただきたいと思いますがいかがでしょうか。

○村田委員

はい。このような形で案になって、この「若者による地域づくりのカタチ～若者のチカラを地域のチカラに～」という報告書を見て、若者自身も、これを見て、自分は、どうしなきゃいけないのかなと考えるきっかけになればいいと思いますし、そこから、それこそ支えてくれる大人や、横に居てくれる大人、または地域の方が、心構えの部分で、もっと一緒になってやっていこうねと、もっと人間っぽいところで繋がりができればすごくいいのかなと思いました。これが神奈川県に広がって行って、それがすごく人々の力になって、神奈川県が少しでも住んでいて気持ちいいな、みんなが良いなって思えるような形になっていけばいいなと思っています。以上です。

○笹井会長

ありがとうございます。他にいかがでしょうか。よろしいでしょうか。貴重な御意見をいただきました。ありがとうございます。今回の御意見を踏まえまして、最終の報告書につきましては私と萩原部会長、坂倉副部会長に御一任いただいて、細かい表現等については事務局と調整させていただいて、最終的な報告書をまとめたいと思います。これで御了承いただきたいと思いますがよろしいでしょうか。はい。ありがとうございます。本日の議題は以上でございます。皆様、貴重な御意見をいただきましてありがとうございます。最後に事務局からお願いします。

○次世代育成部長

申し遅れましたが、県民局次世代育成部長の石渡でございます。今期の協議会も本日最終の協議会となりました。2年間の長きにわたり、御審議をいただきまして誠にありがとうございます。毎回示唆に富むお話をいろいろ聞かせていただいたことをこの場をお借りして感謝申し上げます。今期の協議会では28年3月に改定いたしました「かながわ青少年育成・支援指針」を踏まえまして、「若者による地域づくりのカタチ」副題として、「若者のチカラを地域のチカラに」をテーマにご審議をいただいたところです。部会におきましては昨年3月に取りまとめたいただいた中間報告を踏まえまして、8月に実践検証事業として「多世代ワークショップ」を実施いただき、ありがとうございました。その検証を元にして、有意義な最終報告を取りまとめたいただいたことを重ねて感謝申し上げます。本日御審議いただきました最終報告につきましては3月中に公表できるように準備を進めて参りますので、御承知おきいただければと存じます。委員の皆様には、事務局より最終報告をお送りさせていただきたいと思います。このたび最終報告の提言を受けまして、県としても、市町村を含めた地域の方々と連携しながら、若者が活躍できる地域づくりの実現に向けて努力して参りたいと思います。今、部会長のお話を聞いていて、貴重な5つの御提言をいただきました。知事も、常々コミュニケーションが大事であるということを申しております。県の中だけでなく県と外との関係においても、基本はコミュニケーションであると。この提言を見させていただいて、繋がりをつくる。そして対等な関係を築いて相互に理解して協働していく、そういった場を作る、それはすべて基本にコミュニケーションがあると感じております。この御提言をいただいて、県として、新たに取り組むことが、何かできないかということを検討して参りたいと思います。引き続き委員の皆様

様には、本県の青少年行政に対しまして、御協力、御支援をいただければと思います。2年間誠にありがとうございました。

○笹井会長

それではこれもちまして第4回神奈川県青少年問題協議会を閉会したいと思います。平成28・29年期の審議テーマに関する方針、あるいはその中での事業に対しての御協力、重ねて感謝を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

(以上)